

心理学史の 複線径路

[第8回]

ブルーナー、まだ生きてるってよ。それと、文脈効果ってブルーナーがきっかけだってよ。

サトウタツヤ

立命館大学教授・研究部長。心理調査士のワーキンググループの新年会で、ブルーナーのことが話題になりました。「まだ生きてるの？」的な反応が多数ありました。また、いわゆる文脈効果の提唱者であるということを知ったところ、それもあまり知られていなかったのので、少し調べてみたら、それほど単純ではありませんでした。



ブルーナー (Jerome Seymour Bruner) は1915年10月1日生まれ。現在、満99才です。『心を探して』という自伝を出してからも既に20年。今年の誕生日はおそらく満100才記念の催し物が行われるのではないのでしょうか？

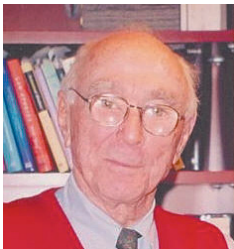


写真1 最近のブルーナー <http://www.phillwebb.net/topics/human/Bruner/Bruner.htm>

「ブルーナーといえば？」という自由連想をすれば、分野や人により違うことでしょう。社会心理学者が想像するのはニュールック心理学という新しい領域を作った「コインの見かけの大きさの実験」であり、認知心理学者は認知革命の担い手としてあがめ奉り、教育心理学者は「教育の過程」が与えたインパクトを語り、質的心理学者は「意味の復権」こそがブルーナーの重要業績だと言い、法心理学者は『ストーリーの心理学』という著書の重要性を説くでしょう。これだけ見ても、彼の業績の偉大さは十分であること、しかもその領域が多岐にわたっていることがよくわかります。

しかし、意外に知られていないのが、ブルーナーが文脈効果を指摘した最初の心理学者の一人だったことです。文脈効果とは、文字の認識/同定が、その置かれた文

脈によって異なるということを指すものです。一般的には図1のように、同じ文字が数字の文脈では13として読み、英文字の文脈ではBとして読める、という例を用いることが多いようです。



図1 典型的な文脈効果のイメージ

では、ブルーナーが図1を使ったり作ったりしたのかといえばそうではないようで、彼が*Journal of General Psychology*に発表した研究 (Bruner & Minturn, 1955) では、タキストスコープを使った知覚実験をしていたのです。彼は「Broken-B」と名づけた刺激をターゲット刺激として用いました。図2のようなものです。



図2 Broken-B

彼は3つの群を用いて、このターゲットがどのように認識されるかを検討しました。第1の群は、先行刺激として文字が示される群です。使用された文字は「L,M,Y,A」の4つでした。第2の群は先行刺激として数字が示され「16,17,10,12」の4つが使用されました。第3の群は数字と文字が混合して先行提示される群です。これらの条件のもと、実験参加者は、自分が見た「Broken-B」を何だと思ったか回答するよう求められました。すると第1の群では

アルファベットのBとして認識する人が多く、第2の群では数字の13と認識する人が多かったのです (第3群の結果は割愛)。

この論文のタイトルは「知覚による同定と知覚の体制化」というものでしたから、何かを知覚的に同定することについて彼は関心をもっていたようです。彼は当時のゲシュタルト心理学における知覚の体制化原理に対してやや懐疑的な立場をとっており、刺激そのものがもつ性質 (たとえば閉鎖性の要因) だけが知覚的同定 (あるものがあるものと認識すること) を決定するわけではないということを示そうとしたのです。彼は、知覚の体制化における「意味づけ」あるいは「再認」あるいは「過去の経験」の役割を重視すべきだと主張しました。彼の一贯した主張が垣間見えるようではありませんか。。。

さて、今回はわざわざ論文を40ドルでダウンロードして精読する羽目に陥りました。その結果、以上のようなことがわかって個人的には満足したのですが、実験に使われた文字は「L,M,Y,A」と「16,17,10,12」でしたから、誰が図1のようなものを考えたかがナゾとして残りました。また共著者のMinturnさんはどんな人だったのかも興味深いところです。

文献

Bruner, J.S. & Minturn, A.L. (1955) Perceptual identification and perceptual organisation. *Journal of General Psychology* 53, 21-28.